

沖縄からの声

となりびと

若い米兵との出逢い

砂川真紀 (沖縄 Y W C A 会員)

中学2年の時、六つ上の兄の大学に米軍ヘリが墜落した。被害が小さかったのが奇跡。兄の命を奪ったかもしれないあの事件は、当時の状況を知れば知るほど、私の中でトラウマ化していく。「また墮ちるかもしれない。」大学の講義中、先生の声が掻き消される度に感じる恐怖と不快感。キャンパスの真上を米軍機が通る時のあのストレスを、一日に何度も感じざるを得ない県が他にあらうか。

初めて辺野古の海を見た時は、エメラルドグリーンに圧倒されて言葉が出なかった。そして、このミントゼリーのような海を潰して造られようとしている新しい基地は、兄の大学に墮ちたヘリが所属していた普天間基地の代替施設とされていることを知った。一つの基地を無くすために海を殺すなんて正気の間人がやるはずがないと思った。

前知事の埋め立て承認から凄まじい時間が流れた。移設反対派の翁長新知事が誕生した。キャンプ・シュワブのゲート前では、オリオンビールと刺身で乾杯をして、三線に指笛、カチャーシーが夜通し続いた。「ついにこの問題から解放される。」そう思った。現実はその甘くなかった。新知事誕生の数日後に工事が再開された。

参院選で圧勝しても、工事が止まる兆しは見えなかった。資材を載せた車両が基地内に入るのを止めるため、ゲート前に座り込んだ。市民を排除するのは幼顔の残る沖縄の機動隊員で、その中には友人のいとこや先輩の姿があった。住民を二分する間接統治。沖縄は植民地なのだと、嫌でも認識せざるを得ない局面に何度もさらされた。

昨年3月の暑い日。座り込みテントにシュワブ所属の二人の若い米兵がミネラルウォーターを差し入れてくれたことがきっかけで、交流が始まった。「毎日目にする抗議の意味が分からないから教えて欲しい。抗議に参加する沖縄の若者と話がしたい。」抗議をしている理由を、琉球の歴史にさかのぼって可能な限り説明した。彼らは私の話真剣に耳を傾けてくれ、さらには帰って自分たちで調べ、考えてみると約束してくれた。

しばらくして「勉強したよ。君たちが正しい。僕たちも新基地に反対するよ」と言ってくれた。英語を勉強してきた意義をこんなにも感じた

ことは無かった。彼らは同時に米軍について批判的に調べ、自分たちが米政府に利用されていると気付いたと言う。この70年間、沖縄の基地から多くの米兵が戦場へ送られ、殺し、殺され、心を病んだ。「人殺しの訓練をして欲しくない。」彼らとの友情が深まるにつれ、私の中の想いはますます強くなる。

1月には絶対に負けられない宜野湾市長選、夏には参院選が控えている。両方でオール沖縄側が勝利しても工事を進めると強情な政府。一つの基地を無くすために、新たな基地を許してしまえば、沖縄から基地は永遠に無くならない。普天間／辺野古の問題が解決したとしても、沖縄には多くの基地が残る。私はゲート前でのこの米兵との出逢いを大切にしたい。対話を続けて、その輪が広がっていけば、解決の大きな糸口になるのではと希望を持っている。隣人を愛したい。愛するからこそ、一日でも早く母国に帰って欲しい。